

# 記述理論と真理値ギャップ説

## On Theory of Descriptions and Truth-Value Gaps

成瀬 翔

NARUSE Sho

### はじめに

本稿では、フレーゲ以後の言語哲学において古典的な位置をなす確定記述 (definite description) の議論を比較検討する。この確定記述をめぐる議論において中心的な位置を占めるのは、いうまでもなくラッセルの記述理論である。周知のようにラッセルは「表示について (On denoting)」において、冠詞と単数の名詞句からなる言語表現を分析する (Russell 1905)。ラッセルは、実在物との結びつきをもたないように思われる「現代のフランス国王 (the present king of France)」などの確定記述に対して、自身が開発した述語論理によって説得力ある分析を与える。そして、F. P. ラムジーが評するに「哲学的分析のパラダイム<sup>1</sup>」とすら呼ばれた。

とはいえ、ラッセルの記述理論に類似した発想は、フレーゲの『算術の基本法則』にも含まれていた (Frege 1893)。フレーゲの記述理論は、記述条件を満たさない名前に対して、予め約定される規約的意味を割り当てる。このフレーゲの方針は、対象約定理論 (chosen object theory) と呼ばれ、カルナップやカプランによって展開された。

しかし、フレーゲ＝ラッセルの記述理論は、ストローソンやドネランなどによって批判される。その批判の骨子は、日常言語において記述を使用する際に、ラッセルの与えた方針ではうまく説明のつかないケースが多数含まれるというものである。

第1節では、まずラッセルの記述理論を確認する。とりわけ、「現代のフランス国王」のような現実世界に対応する存在者が見出されない記述を、どのようにラッセルが分析するのかを検討する。第2節では、ストローソンによるラッセルの記述理論批判を検討する。ストローソンは、聞き手の注意を発話の文脈の中に現れる対象に向けるために、話者は確定記述を用いると論じる。このため、確定記述のラッセル的分析が誤りであると主張する。第3節では、ドネランによる確定記述の帰属的用法と指示的用法の区分を検討する。これらの議論を通じて、確定記述をめぐる言語哲学における議論の「パラダイム・シフト」を見ていきたい。

### 1 ラッセルの記述理論

ラッセルが記述理論を提示した「表示について」は、その目的をめぐって現在でも議論を引き起こす論文であるが、虚構の対象の名前を含め非存在の名前一般についてのパラダイムを設定したことは同意が得られるだろう。以下では、虚構名に関わる問題点に論点を限定し、ラッセルの記述理論を確認しよう。

日常言語の指示表現のカテゴリーの中には、ある対象を指示しない表現が含まれる。とりわけ、固有名<sup>2</sup>と確定記述句を含む単称名辞 (singular term) と呼ばれるカテゴリーには、「リア王」や「現代のフランス国王」のような指示対象をもたない表現が含まれる。通常、単称名辞は、文法上主語として唯一の対象を指し示すと考えられてきたが、ラッセルは記述理論を用いてこの表現を含む文を分析する。ラッセルに従い、「現在のフランス国王は禿である (The present king of France is bald)」という文を例に取ろう。ラッセルはこの文が表現する命題を以下のような論理構造をもつと分析する。

$$\exists x (Fx \wedge Kx \wedge \forall y (Fy \wedge Ky \rightarrow x = y) \wedge Bx)$$

ラッセルのこの分析では、「現在のフランス国王」という文法的な主語は、「現在のフランスの (Fx)」、「国王 (Kx)」、「ただ一人の (Fy ∧ Ky → x = y)」というように、命題の中に論理的にパラフレーズされる。つまり、単称名辞は「本質的に文の部分であり...それ単独ではいかなる意味ももたない」(Russell 1905, p. 43)。単称名辞を主語としてもつ文は、表層的な主語＝述語構造とは異なる、このような複雑な存在命題を表現しているとラッセルは主張する。このような命題においては、文法的主語としての単称名辞は変項 'x' によって置き換えられ、命題関数の述語と、存在の唯一性 (uniqueness) を主張する記述オペレータに分解される。つまり、ラッセルの考えでは、単称名辞は指示のデバイスではなく、命題中に現れる記述の性質を省略したものにすぎないのである。

ラッセルの記述理論は、単称名辞の論理的構造を明らかにするだけでなく、空単称名辞の指示対象にかかわる問題を

解決する。「表示について」以前のラッセルは、『数学の諸原理』において、すべてのタームに対応する存在者を想定するマイノグ主義的存在論を採用していた (Russell 1903)。フランスが王制を敷いていない時代に「現在のフランス国王は禿である」と述べられた場合、(戯画化された) マイノグ主義では、フランス国王は現実には存在しないが、指示されている以上はなんらかの意味で存在する、と主張される<sup>3</sup>。しかし、ラッセルの記述理論では、命題の論理形式に含まれる命題関数「 $\exists x (Fx \wedge Kx)$ 」が偽であるため、それを連言項として含む命題全体も偽となる<sup>4</sup>。したがって、空単称名辞「現在のフランス国王」に対応する論理形式を含む命題が偽であるため、マイノグ主義が主張するようなフランス国王のなんらかの存在は含意されることはない。

ラッセルの記述理論は、「現在のフランス国王」のような確定記述のみならず、固有名にも適用される。ラッセルは、大半の固有名が省略された記述であるとみなした<sup>5</sup>。たとえば、「アリストテレス」のような固有名は、「プラトンの弟子」や「『形而上学』の著者」のような、話者が結び付ける記述の省略とみなされる。したがって、「アリストテレスは哲学者である」という文が表現する命題は、論理的には「プラトンの弟子は哲学者である」や「『形而上学』の著者は哲学者である」と同値であり、さらに記述理論によってパラフレーズされる。このようなラッセルの固有名の分析は、「ペガサス」のような名前にも適用される。ラッセルは「ペガサス」のような空単称名辞に対して、「翼をもつ馬」のような記述を結び付け、その記述を通じて分析する<sup>6</sup>。

しかし、固有名が記述へと還元可能であるならば、記述が表現する性質(命題関数)の存在論的身分が問題となる。つまり、フィクションの記述に対応する、ある種の性質や普遍者にコミットしなければならないのではないかという疑いが生じる<sup>7</sup>。ペガサスのケースは、「翼をもつ馬」は「 $\exists x (Wx \wedge Hx)$ 」という命題関数を持ち、「翼をもつ ( $Wx$ )」と「馬である ( $Hx$ )」という複合的な性質の集合とみなすことが可能である<sup>8</sup>。

ハムレットやシャーロック・ホームズのような多くの性質からなる普通の虚構的対象は、命題関数が表す性質と一意性を表す記述オペレータとに分解される<sup>9</sup>。ラッセルが虚構的性質を認めるのかどうかという問題は、本節の目的を越えるので、以下では記述理論に対する批判に移ろう。

## 2 ストロークソンによる批判—指示と前提

ストロークソンの「指示について (On Referring)」(Strawson 1950) は、ラッセルの記述理論に対する徹底した批判を行ったことで知られている。ラッセルは文の表す抽象的な命題の論理構造に着目したのに対し、ストロークソンは具体的な会話の状況において、どのように話者が文を使用し、聞き手が反応するのかという側面を強調する。この点で、ストロークソンは現在の語用論の先駆者とみなすことができる<sup>10</sup>。

ストロークソンのラッセル批判の眼目は、指示 (referring) が表現のもつ意味論的機能なのか、それとも言語使用者の行為であるのか、というものである。ストロークソンは後者の立場をとり、指示するのは人であり、そのために表現が使用されると主張する。ストロークソンは「これ」や「それ」のような直示詞の例を挙げる (Strawson 1950, p. 333)。ある人物が「これは鮮やかな赤色のものだ (This is a fine red one)」という文を使用したとしても、直示詞「これ」がなにを指示するのかを(指さしや聞き手の注意を向ける動作などによって)明らかにしない限り、「これ」の指示は確定せず、確定した言明とはならない。直示詞「これ」がなにかを指示するのは、話者がその表現を適切な(赤いものがあり、聞き手からも見えるなどの)文脈で発話し、表現が特定の事物を指示する場合に限られる。しかし、ストロークソンの見解によれば、表現が指示するかどうかは使用の問題であり、話者が実際にその表現を使用するときには、指示を行うのは話者であり、表現それ自体ではない。

前節で確認したように、ラッセルの分析では、「現在のフランス国王は禿である」という文は、当該の記述条件を満たす王が存在しないため、偽である。この文を発話する話者に対して、聞き手は真偽を問題にするのではないため、ラッセルの分析は正しくないと主張するのがストロークソンの戦略である<sup>11</sup>。つまり、ストロークソンによれば、話者が発話した文に含まれる「現在のフランス国王」という確定記述を使用して、話者はなにかを指示することに失敗しており、完全な言明をなすことに失敗しているのである。このような発話に対して聞き手は、典型的には「なにを言ってるんだ、フランスに国王はいないよ」と答え、話者の「前提 (presupposition)」つまり、「フランス国王が存在すると話者が信じているのかどうか」を問うだろう。つまり、「現在のフランス国王は禿である」という文の発話は、フランス国王の存在前提がないために、聞き手がこのような反応を示すのである。

さて、ある人が実際に完全に真剣な口調で、あなたに「フランス国王は賢い」と言ったとしよう。「それは真ではない (That's untrue)」とあなたは言うだろうか。わたしは、確実にあなたがそうしないと思う。しかし、彼がたったいま語ったことは、真であったか、あるいは偽であったかとあなたに尋ねたとしよう。あなたは彼がまさに語ったことに同意するだろうか、それとも同意しないだろうか。わたしは、あなたがある躊躇によって、どちらでもない、と言いたいただろうと思う。フランス国王のような人物がいないので、彼の言明が真であったのか偽であったのかという疑問は単に生じなかつたのだ。もし彼が(時代を見誤っていて)明らかに真剣だったならば、あなたは次のようなことを言うだろう。「あなたは誤解している。フランスは君主制ではない。フランス国王はいない。」(Strawson 1950, p. 330)

後に、ストローソンは「実際、われわれは文脈の外から「フランス国王が禿である」[という文]が突然提示されると、非常に動揺を受ける (squeamish) と感じる」と述べる (Strawson 1964, p. 114)。語用論の分野では、ストローソンの用語を踏襲し、このような聞き手の反応を「動揺を受ける (squeamish)」と表現する。

しかし、すべての指示に失敗する確定記述が動揺を与えるわけではない。ストローソンは次のような例を与える。隣に下宿人が住んでいないと知っているにもかかわらず、ガレージセールでお客さんに「隣の下宿人はその合計2倍を払ったよ (The lodger next door has offered me twice that sum)」と言ったとしよう。お客さんも隣に下宿人が住んでいないのを知っている場合、「それは偽だ (That's false)」と述べることは適切である。

そして、わたしが次のように語ることは確かに言い逃れとしては不十分だろう。「なるほど、それは偽ではない。なぜならば、わかるだろうが、そのような人物はいないので、真偽の問題は生じないんでね。」(Strawson 1954, p. 225)

また、次のようなケースをストローソンは提示する。

わたしは無知にもローマを訪れた友人について自慢しており、彼がそこで出会った有名人たちの中の一人としてフランス国王に言及すると仮定しよう。わたしは次のよ

うに述べる。「彼は首相と一緒に昼食を食べて、教皇に謁見して、それからフランス国王とドライブに行ったんだ。」「[それを聞いた]ある者は次のように述べるだろう。「なるほど、少なくともフランス国王とドライブに行ったのは、偽だね (真ではないね) —そのような人物はいないから。」(Strawson 1954, p. 226)

ストローソンは、このようなケースでは、聞き手は言明を偽と認めると主張する。このような相違が生じる理由を Strawson 1964 では、前提の点から詳細に論じられる<sup>12</sup>。以下の二つの文を比較してみよう。

- (1) a. フランス国王は禿である (The King of France is bald)
- b. 昨日、展覧会はフランス国王の訪問を受けた (The exhibition was visited yesterday by the King of France)

われわれは、(1a) を耳にするときは動揺を受け、真でも偽でもないと感じるが、(1b) を耳にするときには偽であると感じる。ストローソンによると、(1a) は失敗した前提をもつが、(1b) は前提をそもそももたない。エーベルトは、ストローソンの前提の説明を話題性 (topicality) の観点から説明する (Ebert 2010, pp. 149-150)。話題性は、文が主張するものを表示する構成要素を際立たせる (marking) と理解される<sup>13</sup>。したがって、エーベルトのストローソンの説明では、話題の確定記述のみが前提を示し、非話題の確定記述は前提をもたず、述語に合併される (absorption)。つまり、(1a) の「フランス国王」は話題の確定記述であり、失敗した前提をもたらずが、それゆえに聞き手に動揺を与える。他方、(1b) の「フランス国王」は非話題の確定記述であり、前提を示さずに複合的述語の一部となるために、聞き手は偽とみなすのである。

ストローソンの議論は、ラッセルが論じなかつた様々な言語使用の側面に光をあてたが、ストローソン自身はこれらの問題を十分に展開することはなかつた。そのみならず、ストローソンの議論には、ラッセル的な記述の用法に対する見落としが含まれていた。このことを指摘したのが、キース・ドネランである。以下ではドネランの議論を検討しよう。

### 3 ドネランの分類—帰属的用法と指示的用法

ドネランはラッセルとストローソンの論争を受けて、記述の様々な言語的現象を検討する。その一つが、ラッセル的な帰属的用法 (attributive use) と区別される、指示的用法 (referential use) の存在である。ドネランによれば、ある事物がどのような性質をもっているかにかかわらず、その特定の事物に焦点を当てるためだけに記述を使用するケースがある。そのようなケースこそが指示的用法である。帰属的用法と指示的用法の相違を理解するために、以下の例を検討しよう。

- (2) スミスの殺害者は異常だ。(Smith's murderer is insane.)  
(Donellan 1966, p. 364, 邦訳 97 頁)

スミスの死体を発見し、誰かが (2) を発話したとしよう。ここで、話者は、誰であれこの殺人を犯した者は異常だ、ということ述べているとしよう。このようなケースが帰属的用法であり、この用法についてはドネランとラッセルのあいだには対立はない (Donellan 1966, pp. 363-364, 邦訳 97 頁)。

次に、ジョーンズという人物がスミス殺害の容疑で逮捕・告発され、法廷に臨んでいるとしよう。ジョーンズの様子はまともではなく、傍聴人たちはジョーンズが有罪であると思っている。その傍聴人の一人が (2) を発話したとしよう<sup>14</sup>。この文脈では、話者は注意を集めている人物 (被告人ジョーンズ) を指示するためだけに「スミスの殺害者 (Smith's murderer)」という記述を用いている。このとき、話者の発話が真となるのは、ジョーンズが実際にどのような性質をもっているかは関係ない。つまり、ジョーンズが実際に殺人を犯したかどうかにかかわらず、異常であるとき、そのときに限り、このケースにおける (2) の発話は真である。このようなケースが、ドネランが指示的用法と呼ぶものである (Donellan 1966, pp. 364, 邦訳 97 頁)。

ドネランによると、ストローソンは指示的用法のアイデアを先取りしていた。話者は特定の事物や場所に対する注意を、聞き手に喚起するために、記述を使用することができる。ストローソンは主張する。しかし、ストローソンは記述の指示的用法に着目するあまり、ラッセルの帰属的用法を見落としているとドネランは批判する。つまり、ストローソンとラッセルは、確定記述がただ一つの仕方でのみ機能すると考えている点で、ともに間違っていたのである。

ドネランこの指示的用法について、以下のような特徴づけをいくつか与えている。

確定記述を指示的に用いてなにかを主張するときは、話者はその記述を用いることで自分が誰もしくは何について述べているかを聞き手が選び出せるようにし、そしてその人物もしくはその事物については何ごとかを述べる。(…) 確定記述が指示的に用いられた場合は、その記述はある人物や事物に注意を向けさせるという特定の仕事をこなすための道具にすぎず、一般的には、同じ仕事をこなす限りほかの記述や名前を用いてよい。  
(Donellan 1966, p. 364, 邦訳 97 頁)

話者が記述を指示的に使用する場合、自身が念頭に置いている人物が誰であるのかを聞き手が認識し、自分がなにごとかを述べようとしているということをつかむことを期待する。ジョーンズの法廷では、「スミスの殺害者」という記述を指示的に用いて、話者はジョーンズについてなにかを述べる意図をもち、聞き手に伝達しようとする。このケースでは、「スミスの殺害者」という記述の代わりに、「ジョーンズ」のような名前や「あの男」や「あいつ」など別の表現を用いても、同じ目的を果たすことができる。続けて、ドネランはさらに特徴づけを与える。

「 $\phi$  は  $\Psi$  である (The  $\phi$  is  $\Psi$ )」という形式をもつ文には二種類の用法があると言える。第一の [帰属的] 用法では、「 $\phi$  であるものがただ一つだけ存在するのでないなら、何も  $\phi$  だと言われていない。第二の [指示的] 用法では、 $\phi$  であるものがただ一つだけ存在するのでないとしても、同じ帰結にはならない。(Donellan 1966, p. 365, 邦訳 99-100 頁)

ドネランは、この論点をリンスキーから引用している。そこで、リンスキーは次のような例を挙げている。ある人が (たとえばパーティで) ある女性に男性の連れがいるのを見て、「彼女の夫は彼女に対して優しい (Her husband is kind to her)」と述べたとしよう (Linsky 1963, p. 80)。その女性が結婚していなかった場合、記述的用法では「彼女の夫」という記述はいかなる人物も表示しないが、指示的用法ではこの連れの男性を指示する。この発話で述べられたことは、その人物が現実には彼女の夫であるかどうかにかかわらず、その人物が彼女に対して優しいということである。この見解に基づ

くと、現実の指示対象は、意味論的な指示対象（記述の表示する人物）とは異なる。つまり、リンスキーの挙げるケースでは、意味論的指示対象は存在しないにもかかわらず、話者は女性の連れの男性を指示していることになるのである。

スミスのケースに戻ろう。裁判でスミスは自殺したことが明らかになり、被告ジョーンズの無実が証明されたとしよう。したがって、スミスの殺害者は存在せず、したがって文(2)に現れる記述「スミスの殺害者」の意味論的指示対象は存在しない<sup>15</sup>。しかし、このようなケースでも、ドネランの主張によれば、文(2)の記述が指示的に用いられた場合には、述べられた内容には変わりがない。つまり、スミスの殺害者がいないにもかかわらず、(2)の話者が述べたことが真であるのは、ジョーンズが異常であるとき、かつそのときに限る。

さらに、ドネランは次のような事例を挙げる。パーティの客の一人のメアリーが、人目を引く風貌の人物を眺めているとしよう。その人物はマティーニ・グラスを傾けている。そこで、メアリーが「マティーニを飲んでいる男は誰ですか？(Who is the man drinking a martini?)」と尋ねたとしよう。ところが、実は、男が手にしているグラスの中の透明な液体は水で、このパーティでマティーニを飲んでいたのは、メアリーから離れたところにいるジョンしかいなかった。ドネランは、この場合でも、メアリーの質問はこの人目を引く風貌の人物についてのものであり、ジョンについてのものではないと主張する<sup>16</sup> (Donellan 1966, p. 366, 邦訳 112 頁)。

ドネランは、話者が記述を用いることで、自分が指示しようとした人物や事物を指示することに成功するのは一体どのような状況においてなのか、という問いを提起した。そして、このような指示は常に意味論的指示対象によって行われるわけではない、ということを示したのである。

## むすびに

以上のように、ラッセルの記述理論をめぐる、ストローソンとドネランの議論を検討してきた。これまでの議論を振り返ってみよう。ラッセルは記述理論によって「現代のフランス国王は禿である」のような記述を含む文を、虚構の対象の要請なしに分析した。この方針は言語哲学におけるパラダイムとして約 50 年間、カルナップやクワインによって洗練された。「表示について」におけるラッセルの主要な目的は、確定記述の意味論を考案することであったが、ストローソンはラッセルの見落とした記述の用法を指摘する。ストローソ

ンは、ラッセル的な文の論理的分析ではなく、具体的な会話の状況において、どのように話者が文を使用し、聞き手が反応するのか検討した。しかし、ストローソンは記述を含む文の発話に専念するあまり、ラッセル的記述の用法を軽視していた。ドネランはラッセルとストローソンの議論を調停し、帰属的用法と指示的用法の二つの区別を与える。ドネランの区別は、「スミスの殺害者」をはじめとするケースをうまく説明することができる。

しかし、ドネランによる議論は、クリプキをはじめとする批判にさらされてきた (Kripke 1977)。クリプキは、ドネランの提案する二つの用法の区別は、意味論の問題ではなく、語用論の問題としてとりあつかわれるべきであると主張する。したがって、ラッセルの記述理論が、確定記述を含む表示句の意味論を提案しているかぎり、ドネラン (およびストローソン) の主張はラッセルに対する批判としては的外れではないか、とクリプキは批判する<sup>17</sup>。クリプキの批判の妥当性については、稿を改めて検討する必要があるだろう。

## 注

- 1 Frank Plumpton Ramsey, "Philosophy," in his *Philosophical Papers*, D. H. Mellor ed., Cambridge University Press, 1990, p. 1. (邦訳, F. P. ラムジー, 「哲学」, 『ラムジー哲学論文集』, D. H. メラー編, 伊藤邦武, 橋本康二訳, 勁草書房, 1994 年, pp. 1-2) ただし、ラッセルの記述理論に対するラムジーの言及は、必ずしも肯定的ではない。
- 2 ここでの固有名は「ソクラテス」のような狭義の固有名であり、フレーゲ的固有名ではない。なお、フレーゲの固有名カテゴリーには、狭義の固有名と確定記述が含まれる。
- 3 このようなケースでは、存在とは区別される「存立する (subsist)」という用語が使われる。なお、マイノング自身はこのような単純化された見解を有していたかどうかは議論が分かれるが、本章の議論とはかかわらないため、詳細には立ち入らない。
- 4 フランス国王が二人以上いる場合には、唯一性条件<sup>18</sup>が偽となるため、命題全体もまた偽となる。
- 5 ラッセルは一般的な固有名と区別される、記述には還元

できない直示的な論理的固有名を認める (Russell 1911)。

- 6 クワインは、「ペガサス」のような名前が、記述理論を用いて記述へのパラフレーズが見出されない場合、人工的記述を与える方針を提示する。クワインは、「ペガサスであること」という、仮定によって分析不能で還元不能な性質にうったえ、その表現として「ペガサスである (is-Pegasus)」とか「ペガサスる (pegasizes)」などの動詞を採用する (Quine, 1948, pp. 7-8)。クワインの方針に従えば、「ペガサス」は「ペガサスるもの」のような記述と同値であり、記述理論によって分析可能となる。

- 7 クワインは、「ペガサスる」のような述語を導入した際に、それに対応する属性すなわち「ペガサスること」にコミットすることを認める。

ペガサスることが—プラトンの天上界であろうがひとの心の中にあるであろうか—あると認めることになると思われるならば、それはそれでよい。これまでのところ、われわれも [クワインが想定する架空の哲学者] ワイマンもマックスも、普遍者があるとかないといったことについて争っていたのではなく、ペガサスのあるなしについて争っていたのである。 (Quine 1948, p. 8)

- 8 しかし、三浦 1995 は次のような例を挙げる。

...ここでいかにもありそうな虚構物語を想定しよう。その物語中に「太郎がいる」という文が現われており、太郎なるものはその文にしか登場せず、しかもその文は物語中の他の文と一切関係を持っていないとしよう。そうしたいわば孤立的キャラクターは分析不能・還元不能なほど基本的であるから、太郎についてはただ「太郎がいる」もしくは という命題を述べることができるのみである。そこで実体としての太郎は確かに消え失せてはいるが、T (太郎性) というまとまった単位として再登場してきている。カテゴリーこそ違え、「太郎」の指示対象はやはり存在することになる。それは太郎たることという普遍者である。(三浦 1995, pp. 147-148)

このような問題に対して、太郎は「太郎」という名をもつ、という性質が付与されているのだから、そうした記

述に還元できる、という反論が可能であるだろう。フレーゲは「概念と対象について」でこのようなパラフレーズの方針を示す。

「[ジュリアス・シーザー] という名前をもつ一人の男が存在する」は一つの意義をもつとしても、「ジュリアス・シーザーが存在する」という文は真でもなければ偽でもなくナンセンスなのである。しかし、[一人の男 (ein Man) という] 不定冠詞が気づかせてくれるように、前者の場合に…われわれは概念をもつ。 (Frege 1892, p. 200)

フレーゲは、「存在する」という述語が、項として対象をとる1階の概念ではなく、1階概念をとる2階概念であるとみなす。つまり、固有名「ジュリアス・シーザー」を含む文「ジュリアス・シーザーが存在する」は、カテゴリーミステイクであり、概念語「[ジュリアス・シーザー] という名前をもつ一人の男」によって置き換えられなくてはならない。したがって、フレーゲの方針を太郎のケースに適用するならば、「太郎が存在する」は「[太郎] という名をもつ一人の男が存在する」によって置き換えることができるだろう。この方針を採用すれば、虚構的性質「太郎性」を想定することなく、「[太郎] という名をもつ一人の男」という記述に還元可能である。三浦は次のように主張し、この方針を拒絶する。

しかし「太郎」は作中の人物が作中で持つ名ではなく、作者が現実からの操作のために便宜的につけた符牒である場合も想定できる。(戯曲でよく「男1」「男2」といった名が出てくることを想起せよ)。(三浦 1995, p. 148)

しかし三浦の主張は、「作者によって「男1」と名づけられた一人の男」のように、記述を複雑にすれば回避可能であると思われる。三浦も認めるように、「太郎」のケースは、厳密な意味では本当に単純な虚構的对象にのみ適応される (三浦 1995, p. 148)。

- 9 リンスキーは、ラッセルの存在論が命題関数という性質を世界の基本的構成要素として要請する内包論理であると主張する (Linsky 1983)。この解釈を採用すれば、真正な性質と虚構的性質の区別はトリヴィアルなものとな

るが、この点に関しては以下では論じない。

- 10 言語学・語用論の立場からストローソンを擁護する議論としては、フォン・フィンテルとエーベルト夫妻が挙げられる (von Fintel 2004, Christian & Cornelia Ebert 2010)。フォン・フィンテルはストローソンに同意し、「現在のフランス国王は禿である」のような発話の真理値ギャップ説を主張する。
- 11 ラッセルはストローソンに対する応答論文において、このような文が真でも偽でもないという直観を否定する。

例えばある国では、宇宙の支配者が賢いということ  
を偽であると考えたならば、いかなる者も公職に就  
けないという法律があると仮定しよう。私は、スト  
ローソン氏の理論に乗じた無神論者が、この命題は  
偽であるとみなさないと述べるなら、どこかずい  
性格だとみなされるだろうと考える。(Russell 1957,  
p. 389)

ラッセルは、ストローソンの真理値直観の信頼性が低く、  
学問的な理論化に適さないとみなした。トマソンによれ  
ば、この事例においてラッセルとストローソンがまったく  
正反対の直観を持ったように思われるので、両者の直  
接的な影響関係はほとんど見られない (Thomason 1990,  
p. 327)。

- 12 ストローソンの元来の例は以下のとおりである。

たとえば、フランス国王はいない、そしてプールが  
地元でない、と述べよう。しかし、街では展示会が  
ある、そしてジョーンズの存在は疑いない、と述べ  
よう。次の言明を検討しよう。

- (i) ジョーンズは地元のプールで午前中を過ごした  
(ii) 昨日、展示会はフランス国王の訪問を受けた。  
次のように語ることは十分自然であるように思われ  
る。すなわち、(i) それ [地元プール] がないので、  
ジョーンズは地元のプールで午前中を過ごしたとい  
うことは、まったく真ではないか、偽である。しか  
し、そのような場所がないので、どんな仕方でジョ  
ーンズが朝を過ごしたとしても、彼は地元のプールで  
はそれを過ごさなかった。そして、同様に、(ii) 昨日、  
展示会はフランス国王の訪問を受けた、ということ

は、まったく真ではないか、偽である。昨日、展覧  
会が誰の訪問を受けようとも、そのような人物はい  
ないので、それはフランス国王の訪問を受けなかつ  
た。(Strawson 1964, p. 112)

- 13 カルナップは『意味と必然性』において、「主題の原理  
(principles of subject-matter)」や「ついで性の原理  
(principles of abutness)」と呼ぶ (Carnap 1947, § 24)。
- 14 ただし、この発話における述語「異常だ」は、「異常な犯  
罪を行った」という意味ではなく、「異常なふるまいをし  
ている」という性質を表すことにする。
- 15 ここではスミスが自分自身を殺害したという解釈は除外  
する。
- 16 このような種類の事例は、ニアミス・ケース (near-miss  
case) と呼ばれている。
- 17 しかし、荒磯 2005 のようにネランの着想を受け継ぎ、  
指示的用法を意味論の問題とする見解も存在する。

#### 参考文献

- Carnap, P. (1947) *Meaning and Necessity*, University of  
Chicago Press (『意味と必然性—意味論と様相論理学の研  
究』永井 成男訳、紀伊国屋書店、1974 年)
- Donnellan, K. S. (1966) Reference and definite descriptions,  
*Philosophical Review* vol. 75-3, pp. 281-304.
- . (1970) Proper names and identifying descriptions,  
*Synthese* vol. 21 (3-4), pp.335-358.
- Ebert, C. & Ebert, C. (2010) On Squeamishness of the Royal  
Kind, in: T. Hanneforth & G. Fanselow (Hrsg.), *Language  
and Logos. Festschrift for Peter Staudacher on his 70th  
Birthday*, *Studia grammatica* vol. 72, Berlin: Akademie  
Verlag.
- Frege, G. (1892) Über Begriff und Gegenstand, in Frege  
(1967) (『概念と対象について』、野本 和幸訳、フレーゲ  
(1999a) 収録)
- . (1893 & 1903: GGA) *Grundgesetze der Arithmetik:  
Begriffsschriftlich abgeleitet von G. Frege*, Hildesheim,  
Olms (『算術の基本法則』野本 和幸、横田 榮一、金子 洋  
之訳、フレーゲ (2000) 収録)

- . (1967) *Kleine Schrifte*, Hildesheim, Olms
- Kaplan, D. (1972) What is Russell's Theory of Descriptions?, In A. D., Irvine (ed.), *Bertrand Russell: Critical Assessments*. Routledge. 1999.
- Kripke, S. (1973/2013) *Reference and Existence*. The John Locke Lectures, Oxford University Press.
- . (1977) Speaker's reference and semantic reference, In Peter A. French, Theodore E. Uehling Jr & Howard K. Wettstein (eds.), *Studies in the Philosophy of Language*, pp. 255-296, University of Minnesota Press. (「話し手の指示と意味論的指示」黒川 英徳訳、『現代思想』第23巻第4号、266-295頁、1995年)
- . (1980) *Naming and Necessity*. Oxford: Blackwell. (『名指しと必然性—様相の形而上学と心身問題』八木沢 敬、野家 啓一訳、産業図書、1985年)
- Linsky, L. (1963) *Reference and Referents*, In Charles E. Caton (ed.) *Philosophy and Ordinary Language*, Urbana, University of Illinois Press, pp. 74-89.
- . (1983) *Oblique Contexts*, University of Chicago Press.
- Quine, W. v. O. (1948) *On What There Is*, in Quine (1953)
- . (1951) *Two Dogmas of Empiricism*, in Quine (1953)
- . (1953) *From a Logical Point of View*, Harvard University Press. (『論理的観点から—論理と哲学をめぐる九章』飯田 隆訳、勁草書房、1992年)
- Russell, B. (1903) *Principles of Mathematics*, Routledge.
- . (1905) *On Denoting*, *Mind*, vol. 14, pp. 473-493.
- . (1911) *Knowledge by Acquaintance and Knowledge by Description*. *Proceedings of the Aristotelian Society* vol. 11, pp. 108-28.
- . (1957) *Mr. Strawson on referring*, *Mind* 66 (263), pp. 385-389.
- Strawson, P. (1950) *On referring*, *Mind* 59 (235), pp. 320-344.
- . (1954) *A reply to mr. Sellars*, *Philosophical Review* 63 (2), pp. 216-231.
- . (1964) *Identifying reference and truth-values*, *Theoria* 30 (2), pp. 96-118.
- . (1974) *Subject and Predicate in Logic and Grammar*. London: Methuen.
- Thomason, R. (1990) *Accommodation, Meaning, and Implicature: Interdisciplinary Foundations for Pragmatics*, in P. Cohen, J. Morgan, and M. Pollack (eds.), *Intentions in Communication*, Cambridge, pp. 325-363, MA: MIT Press.
- von Fintel, K. (2004) *Would you believe it? The King of France is back!* In: Reimer M, Bezuidenhout A (eds.) *Descriptions and beyond*, Oxford University Press, pp 315-341.
- 荒磯 敏文 (2005)「痕跡を通じた指示をともなう確定記述の指示的用法について」『科学哲学』第38号1巻、47-61頁
- 松坂 陽一編 (2013)『言語哲学重要論文集』、春秋社
- 三浦 俊彦 (1995)『虚構世界の存在論』、勁草書房
- フレーゲ、ゴットロープ (1999)『フレーゲ著作集第4巻—哲学論集』黒田 亘、野本 和幸編、勁草書房
- . (2000)『フレーゲ著作集第3巻—算術の基本法則』野本 和幸編、勁草書房